



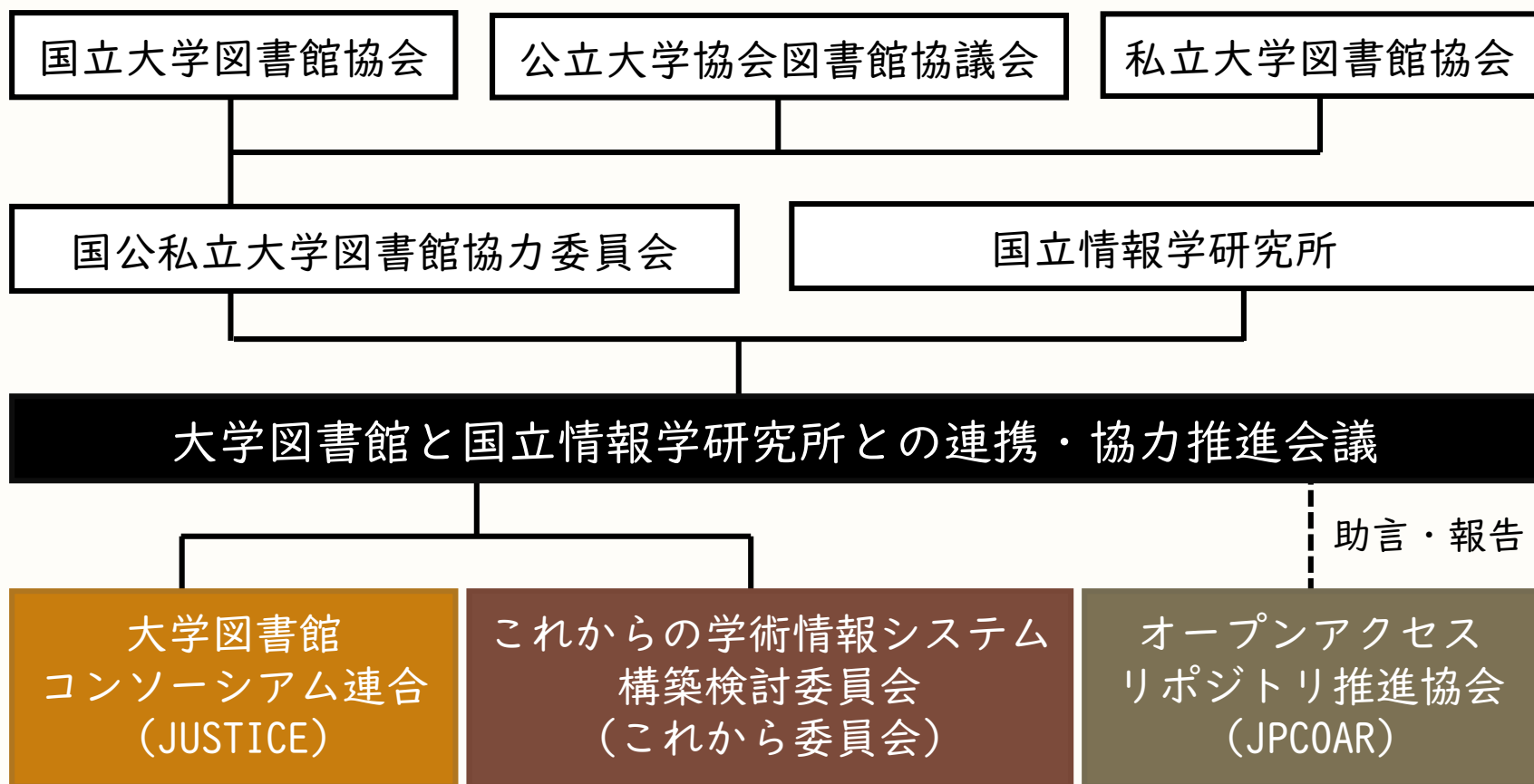
「これからの学術情報システムの 在り方について (2019)」で描く 学術情報基盤を支えるシステム と制度のこれから

これからの学術情報システム構築検討委員会
小山憲司 (中央大学)

目次

- イントロダクション
- 学術情報基盤を支えるシステムと制度の論点

検討体制の概要



これから委員会における検討の経緯

	委員会	電子リソース	目録システム
2012	委員会設置	ERDBプロトタイプ構築プロジェクト (-2013)	
2014		電子リソースデータ共有WG	
2015	「これからの学術情報システムの在り方について」	電子リソースデータ共有作業部会 設置 ERDB-JP公開	NACSIS-CAT検討作業部会 設置 「NACSIS-CAT/ILLの軽量化・合理化について（基本方針案の要点）」
2016		「電子リソース管理システムの利用可能性の検証について（平成28年度最終報告）」	「基本方針」 「実施方針」
2017	これからの学術情報システムに関する意見交換会2017	「電子リソース管理システムの利用可能性の検証について（2017年度最終報告）」	
2018	「これからの学術情報システムの在り方について（2019）」	「電子リソース業務の管理基盤・ワークフロー構築についての検討（2018年度報告）」 他	「NACSIS-CAT/ILLの軽量化・合理化について（最終まとめ）」 （→CAT2020）
2019	作業部会の再編	<ul style="list-style-type: none"> システムモデル検討作業部会 システムワークフロー検討作業部会 	
2020			CAT2020開始（8/3）

「これからの学術情報システムの在り方について」 (2015年5月)

2. 進むべき方向性

これからの学術情報システムに求められるのは、ユーザーが必要とする学術情報を直接的かつ迅速に入手することができる環境であり、これらを実現するために、以下の3点を推進する必要がある。

- (1) 統合的発見環境の提供
- (2) メタデータの標準化
- (3) 学術情報資源の確保

「これからの学術情報システムの在り方について」 (2019年2月)

- 大学図書館等とNIIは、高等教育機関等における教育及び研究を支えるため、総合目録データベースと各大学図書館等の図書館システムを基礎として、研究者や学生等が電子情報資源や印刷体を区別なく利用できる、統合的発見環境を実現する新たな図書館システム・ネットワークの構築、管理、共有及び提供にかかる活動を連携して推進する。

「これからの学術情報システムの在り方について」 (2019年2月)

3. 進むべき方向性

これまでの検討を踏まえ、これからの学術情報システムが実現すべき機能及び検討課題について、以下の5点にまとめた。

- (1) 統合的発見環境を可能にする新たな図書館システム・ネットワークの構築
- (2) 持続可能な運用体制の構築
- (3) システムの共同調達・運用への挑戦
- (4) メタデータの高度化
- (5) 学術情報資源の確保

「これからの学術情報システムの在り方について」 (2019年2月)

4. 次に取り組むべき課題

本委員会では、3のうち、次に取り組むべき課題を以下の3点とする。

- (1) 統合的発見環境を可能にする新たな図書館システム・ネットワークのモデル構築

システムワークフロー検討作業部会（飯野勝則主査）

- (2) 持続可能な運用体制の構築

- (3) システムの共同調達・運用に向けた課題検討

システムモデル検討作業部会（相原雪乃主査）

方針 ビジョン

これから委員会

中央システム の提供

NII

個別課題の解決

図書館システム（ローカル）
電子リソース
メタデータ

ワークフロー部会

運用

共同調達
組織

コミュニティ

モデル部会

目次

- イントロダクション
- 学術情報基盤を支えるシステムと制度の論点

これから委員会が変わらず目指すもの

利用者の
利便性の向上

図書館業務の
最適化・高度化

基盤の検討・整備

在り方(2019) で描いたこと

発見と
アクセス

スリム化
最適化

利用者

- ・発見可能性の向上
- ・アクセスの向上
- 利用者の文脈への接近

国立情報学研究所

【貢献】

- ・学術コミュニティのニーズに沿ったシステムの開発・提供

【恩恵】

- ・共同利用機関としてプレゼンスの向上
- ・研究開発

検索
インタ
フェース

メタデータ
DB

コンテンツ
DB

業務
アプリ

図書館システム・
ネットワーク

図書館

高度化
最大化

システム+制度

- ・持続可能性
 - 経費削減
 - 改善・高度化
 - 人材育成
- ・相互運用性
 - 国際標準化
 - 外部連携
 - 学術コミュニティへの寄与

【貢献】

- ・学術情報の提供
 - メタデータ
 - コンテンツ
- ・運営・意思決定への関与
- ・適切な経費負担

【恩恵】

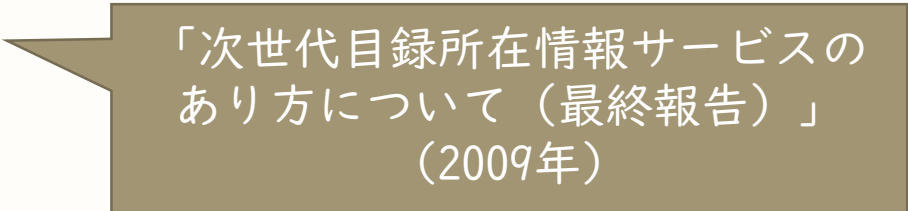
- ・図書館運営の省力化
 - 業務の標準化
 - 人員の適切な配置
- ・図書館運営の効率化
 - 経費縮減
 - システムの高度化
- ・図書館運営の高価値化
 - 資源共有の強化
 - 需要に合ったコレクション構築

利用者



発見と
アクセス

- 発見可能性の向上
 - なにを、どこまで提供するのか
 - 外部のメタデータをいかに利用するか
- アクセスの向上
 - 入手までの経路と手段をいかに確立するか
- 利用者の文脈への接近
 - 一利用者の文脈
 - 集団としての利用者の文脈



「次世代目録所在情報サービスのあり方について（最終報告）」
(2009年)


図書館（貢献）



スリム化
最適化

- メタデータ
 - 書誌、所蔵、契約情報、利用条件、利用メタデータ
- コンテンツ
 - ILL、デジタルアーカイブ資料、研究データ
- 運営・意思決定への関与
- 適切な経費負担

図書館（恩恵）



高度化
最大化

- 図書館運営の省力化
 - 業務の標準化、人員の適切な配置
- 図書館運営の効率化
 - 経費縮減、システムの高度化
- 図書館運営の高価値化
 - 資源共有の強化（シェアードプリントとその展開）
 - 需要に合ったコレクション構築

国立情報学研究所

【貢献】

- 学術コミュニティのニーズに沿ったシステムの開発・提供

【恩恵】

- 共同利用機関としてプレゼンスの向上
- 研究開発

システム＋制度

- 持続可能性
 - 経費削減
 - 改善・高度化
 - 人材育成
- 相互運用性
 - 国際標準化
 - 外部連携
 - 学術コミュニティへの寄与

これからの学術情報システムの構築を目指して
—これからの学術情報システム構築検討委員会における
これまでの議論と今後の展開—

Upgrading the scholarly information systems in Japan:
Past, present, and future of the activities of the Future Scholarly Information Systems
Committee

小 山 憲 司

Kenji KOYAMA

抄録：これからの学術情報システム構築検討委員会は、大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議の下に設置された、国公立大学の枠を超えて今後の学術情報システムのあり方について検討する組織である。2012年の設置以降、それまでに行われてきた議論を参照しながら検討を進め、2015年5月にその後の推進方針となる「これからの学術情報システムの在り方について」をとりまとめた。電子情報資源のデータの管理・共有とNACSIS-CAT/ILLの再構築（軽量化・合理化）の2点を当面の課題として設定、それぞれ作業部会を設置し、具体的な活動を進めたほか、将来に向けた取り組みについても議論を重ねてきた。本稿ではこれまでの議論を紹介するとともに、私見も交えながらこれからの学術情報システムの方向と課題につ

ご清聴ありがとうございました